

## 新規放課後活動に対する小学児童の満足度調査 ——子ども自身による「放課後子ども教室」評価の支援——

北原靖子\*・蓮見元子\*\*  
川嶋健太郎\*\*\*・浅井義弘\*\*\*\*

### A Research of Child User's Satisfaction with a New After School Activities in The Elementary School; Enforcing Evaluation by Children Oneself

Yasuko KITAHARA, Motoko HASUMI, Kentaro KAWASHIMA, Yoshihiro ASAI

#### 要 旨

放課後子どもプランに準拠して2007年度から展開されている我孫子市「放課後子ども教室」(呼称:あびっ子クラブ)活動に対し, 当市保健福祉部保育課のご協力を得て, 利用当事者である児童の活動実態と満足度を把握する調査を実施した。

あびっ子クラブの利用者は1年から6年まで全学年におよび, その発達には大きな開きがあるため, 調査にあたっては質問内容・回答方式・手続きには相応の配慮が必要であった。また調査に割ける時間や人手や場所にゆとりがなく, 活動プログラムも日によって違うため, その意味でも, どうすれば子どもの声を汲み取れるかが課題であった。そこで筆者たちは, 学生サポーターの手を借りて児童1人5分の簡単な「ひとことアンケート」を作成実施し, さらに参与行動観察もと混ぜつつ, 簡単なアンケートで具体的にどのような分析ができるか試行した。

その結果, 子どもたちは当クラブに高い満足感を抱いているが, 学年によって活動実態や満足度が異なるなど, 今後の活動運営に活かしてゆけるヒントがいくつか見出された。また, 調査結果を現場にフィードバックする中で, 目的に応じて評価バッテリーを組む意義と, アンケートに新たな手法を導入する提案を行った。これらの活動を通して, 心理学の専門性を地域の諸活動に活かす一つのありようが示されたといえよう。

キーワード: 満足度評価, 小学生, 放課後子ども教室

---

\*准教授 発達心理学

\*\*教授 発達臨床心理学

\*\*\*助手 学習心理学

\*\*\*\*教授 臨床心理学

## 1. はじめに

平成18年度より我が国では、「地域社会の中で、放課後や週末等に子どもたちが安全で安心して、健やかに育まれるよう」という趣旨にのっとり、文部科学省の放課後子ども教室推進事業と厚生労働省の放課後児童健全育成事業の一体化連携化を図る「放課後子どもプラン」が創設され、翌19年より各地域で具体的な取り組みが進められている（放課後子どもプラン連携推進室、2007）。これを受けて、我孫子市では平成19年度放課後子どもプラン推進事業費補助金を受け、我孫子市立第一小学校をモデル校として、これまでの学童保育室とは別に、新たに全校生徒を対象とする一小あびっ子クラブ（以下「あびっ子」とする）を立ち上げた。本活動は、千葉県の中では「放課後子ども教室と放課後児童クラブの連携」方針のもと実施した先駆けであり、その実際については連携推進室のHP内にも詳しく紹介されている。筆者たちも現場を何度か訪れているが、活発な子どもたちと誠意あふれるスタッフならびに見守りサポーターや指導リーダーの様子を拝見するにつけ、このような事業に真っ先に取り組むことができるのも、地域としてのまとまりと力がある我孫子市ならではの個性であろうと感じた。

このあびっ子に筆者たちが関わることになったそもそものきっかけは、我孫子市保健福祉部保育課から本学心理学科に、大学生たちがあびっ子サポーターとして子どもたちと関わってもらえる可能性はないかとお尋ねが来たことにある。これまで発達心理学領域で学ぶ心理学科生たちが、さまざまな発達支援の現場でボランティアを行っていたことが契機となったのであろう。この話を学生たちに伝えたところ、とりあえず1名が名乗りを上げ、サポーターとして定期的にあびっ子に参加しながら卒業論文の調査研究を行うこととなった<sup>1)</sup>。しかし実際に学生たちに参加協力を促したり意見を求めたりしてみると、サポーターの数を集めるのはなかなか難しいことも明らかになった。大学生ともなれば我孫子の近辺に在住しているとは限らず、また普段は講義やアルバイト、上級学年では就職活動などのさまざまな予定がある。あびっ子の開所は平日午後2時過ぎから5時過ぎ、土曜は9時から5時まで及ぶため、これらに全て参加することは不可能で、やりくりしてもせいぜい週1、2回の参加とならざるを得ないのである。一方、筆者たちは話を伺うなかで、大学には現場に直接携わるのとは異なる種類の貢献が可能ではないかと考えた。すなわち、心理学の専門性を活かして、本活動を現場が適切に点検評価するための方法を検討し提案することである。

子どもに対するさまざまな施策の歴史をふりかえってみれば、子どもたちの「ためを思って」新たな道を始めてはみたものの、なかなか期待通りにいかなかった例は少なくはない。結果がどうなるかには多くの要因が関与するので予測しきれないものではないが、先端的な意欲ある活動

であればなおのこと、その実行に際しては、適宜しっかりと現場検証が求められる。ことに子どもを対象とした新たな活動においては、彼らが直接の当事者であり、かつ社会的には従属の立場であるがゆえに、子どもたち自身の思いをきちんと捉えておくことが重要であろう。「子どもの権利条約」以降、子ども自身の考えや意見を表明する権利を認め尊重する姿勢は国際的なスタンダードとなっている。

とはいえ、「子どもの声を汲み取る」ことは、決して簡単なことではない。大学であれば、FD（ファカルティ・ディベロップメント）の流れに沿って、授業を受ける当事者である大学生の声を集めて授業展開に活かす自己点検評価体制が整っている。しかしあびっ子では、大学生を対象に授業ごとに実施する質問紙調査法をそのまま使えるとは期待できない。当然、彼らの年齢や集まる場所にふさわしい方法とは何かを一から模索してゆく必要があるだろう。そこで筆者たちは、学生サポーターの件で協力するだけでなく、利用児童に一度簡単な調査を試行して、あびっ子をどうとらえているかを尋ねてみたいとお願いした。本稿では、この調査結果報告を収録すると共に、調査を通して得た現場とのやりとりをふりかえりつつ、児童による評価を適切に行うための課題について述べる。

## 2. 本調査の目的と方法

あびっ子を立ち上げるに際しては、前年度に検討委員会が第一小学校の保護者や児童生徒を対象として「居場所」に関する実情や希望を問うアンケート調査を実施しており、筆者たちは後にその丁寧な報告書も見せていただいた。また筆者たちが最初に現場に伺った6月でも、2時半の受付開始時点で当日参加児童氏名は名簿できちんと把握され、閉室後にスタッフ間で行われた反省会の席上では、その名簿を元にその日の全利用者数や学年別性別内訳などの基本的な実数が確認されていた。子どもたちの様子で気になったことなども席上で情報交換され、日々の実践から子どもたちの声を汲み取って運営しておられる様子であった<sup>2)</sup>。

しかしながら筆者たちが見たところ、開所直後当時のあびっ子は、今ここで行った活動の手ごたえを知るにとどまっており、そこに課題が残ると思われた。つまり、「学年によって子どもの評価は違うのか、違うとしたらどのように違うのか」「どの場所に人気があるのか」など、手ごたえの違いをもたらず決め手をさぐり、得た結果を今後の運営に役立ててゆく見通しをもって「子どもにたずね、答えを聴きとる」ことである。運営の在り方自体がまだ完全に定まっていない初年度であればこそ、このように聴いて活かす手立てをしっかりと探しておくことは大切ではないだろうか。

あびっ子は、そのような試みを行ううえではさまざまな困難（すなわち克服すべき課題）が伴っていた環境であった。そもそも小学1年から6年の幅広い年齢層に通じる質問を作ること、工夫が必要である。現場はまだプログラムが固まっていない時期で、大人の人数も不足がちであり、調査を行う場所のゆとりもなかった。さらにあびっ子は子どもたちの自由な活動を尊重しているので、子どもたちが遊ぶ場所も帰る時間もまちまちである。そのうえ「今日は校庭が使えない」「今日はチャレンジタイム（習字・囲碁・剣玉など、地域の大人がリーダーとして子どもと関わる特別なプログラム）がある」など、日々の活動形態も多様であった。しかしスタッフの方々は筆者たちに協力を惜しまない姿勢でいらして下さったので、片隅の一隅にて簡単に終わるものであれば、直接児童たちに働きかける余地はありそうだった。また簡単な質問でも、プログラム内容や学年年齢などの諸変数と組み合わせて分析することによって、利用傾向をある程度は把握できると予想された。

このような趣旨のもと、現場と子どもになるべく負担をかけず行うことを大前提として、学生サポーターの手を借りて筆者たちは7月に10日間にわたる「あびっ子クラブひとことアンケート」調査を試行した。まず質問は「今日はどれくらい楽しかったですか」「いっぱい遊んだ場所はどこですか」など極力シンプルで複数項目から答えを選択してもらうものを中心とし、イラストを用いるなどして低学年でも理解しやすいよう工夫した上で、一人5分以内には納まるものとした。また調査期間10日中9日間については、混雑する終了時刻前後を避け、本学学生サポーターが帰宅準備コーナーに待機して途中で帰る子どもが来るたびに声かけし、アンケートへの協力依頼を行うものとした。ただ、この方式では一日10 - 20名程度しか把握できない上に、5時の終了時刻まで遊ぶ多数派の実態をつかめない。そこで1日はスタッフの方々にご協力をお願いし、活動終了時刻前まで残って遊んでいた子どもたち48名に対して、各場所一斉にアンケート協力を呼びかけていただいた。アンケート用紙を渡して記入してもらうのは難しそうな場合は、一人ひとりに質問を読み上げ答えを聴きとって代わって記入したので、簡単な「ひとことアンケート」でも手間はかなりなもので、実際には現場に負担をおかけしてしまった点はまことに申しわけないことであった。さらにスタッフの方々からは、アンケート分析に不可欠な受付時実人数などの基礎統計資料や、当日の活動場所についての詳しい情報もご提供いただいた。あらためて、ご尽力くださった現場の皆さまに心から感謝申し上げます。実際の具体的な手続きは、本稿後半に資料として添付した報告書本体に記載されているので、そちらを参照されたい。

### 3. 結果と考察

紙面の都合上、調査結果の詳細も報告書本体に譲ることにするが、本調査アンケートで「子どもの声を聴いた」もっとも直接的な成果としては、当日のあびっ子に関する満足度を調査した（結果7：あびっ子クラブに対する満足度）が挙げられる。満足の度合いを4件法で把握すると共に、楽しいとする基準を何においているかを確認したものである。本結果を通して利用児童たちがあびっ子をたいへん高く評価していることが確認されたと共に、利用実数はもっとも多い1年生だが、その満足度には若干の課題が残ることが明らかとなった。また、「家で過ごすのとどちらが楽しいか」と比較対象を用いた質問を設けることによって、まさにギャングエイジに相当する小学3年生の満足度がもっとも高いことも明らかとなった。

一方、「組織的に調べた」成果例としては、（結果3：人気の活動場所）が挙げられる。あびっ子では日々活動可能な場所が異なるために、ある日の「いちばん遊んだ場所」がそのまま一番人気であるとは限らない（たとえば校庭が利用できない日には、校庭は選ばれないのは当然である）。そのため、10日分全体を俯瞰してどの場所が人気かを把握するには、当日の活動プログラムを参照して選択率を補正する必要があった。その補正値を「人気支持率」として定義し用いたことによって、「放課後子どもプラン」によって新たに利用可能となった学校施設の人気を公平に把握することが可能となり、体育館の人気が高いことが確認された。さらに、人気支持率の学年比較を行うことによって、学年によって支持率には差異があり、遊びのあり方が異なっていることも明らかとなった。

もちろん、アンケートのように改まって尋ねて答えてもらうだけでは、子どもの声を本当に汲み取れるものではない。はっきりした形にならない「声なき声」を聴き取ってゆくことも重要である。そのためには子どもたちの活動に寄り添い、必要に応じて共に活動したり声かけしたりしながら、個々の児童の様子を丁寧に観察してゆく必要がある。その点では、中心に立って運営に携わるスタッフよりも、子どもの見守りに専念できるサポーターの方が有利な立場であろう。さいわいにして今回は、心理学専攻生として既に臨床的な姿勢と参与観察の手法について学んでいた本学学生がサポーターであったため、形式的なアンケートをこなすだけでなく、自分のサポーター活動の記録の中から子どもと大人が関わるエピソードについても収集紹介することができた。こうした「関わって意を汲み取った」例としては、本報告の（結果6：大人との関わり）が挙げられる。大人が関わるというと、つい特別な企画にリーダーとして参加してもらう目立つ場面を想定しがちであるが、本結果から、普段の活動の中で大人がちょっとした声かけやさりげない調整を的確に提供してゆくことがもっとも大切だとよく理解できた

のではないだろうか。

このようにして本調査の結果をとりまとめた報告は、我孫子市「子どもの居場所」事業検討委員会の会議資料として掲載させていただくことができた。一応手ごたえを得た本調査ではあるが、よいことばかりではない。実際に現場で行ってみて、この手続きのままではとても現場で日常的には実施できないという、負の手ごたえを得たのも事実であった。使えない第一の理由は、やはり労力面のコストである。今回のように質問紙法の形態では低学年には無理があり、かといって個別面接や行動観察ではより多くの負担がかかる。とりあえず今回用意した質問項目であれば低学年にも通じることは確認できたが<sup>3)</sup>、手続きそのものは抜本的に見直す必要があるのは明らかであった。実施できない第二の理由は、分析の複雑さである。今回は児童の回答をコンピュータにデータ入力し、活動プログラムなど別途の情報についてもデータを加えた上で、統計処理専門ソフトを用いて分析を行った。特殊で高価な専用ソフトや入力業務を要する分析では、その日の活動をその日のうちに参照するなどあり得ないのである。

#### 4. 今後の課題

以上の結果と反省をふまえて、現在筆者たちはパソコンを利用して質問を音声で出力し、児童がタッチパネル上の選択肢に指で触れて回答する方式の新しいアンケート手続きを試行中である。「ここで今、何を知りたいか」が明確ならば、パソコンさえあればあらかじめプログラムしておくことが可能である。その日一日だけの把握ならば単純集計だけでよく、一般的な表計算ソフトでも十分可能である。また、直接入力になれば結果を書き写す手間もなく、あらかじめフォームを作成しておけばその場ですぐ結果をグラフ等で表示でき、把握もしやすい。

先の報告書を提出後しばらくして、今回の質問から選択回答部分のみを抜き出し、一度あびっ子に出向いて子どもたち30名ほどに操作してもらったところ、1年生でも混乱なく1分以内で操作できていた。パソコンで遊んでしまうかと懸念していたのだが、ゲーム世代の彼らにとってはパソコンの存在にも画面上の操作にもすでになじみがあるのだろうか、特に興味を持ちすぎるでもなく、程よい使い方ができるようであった。さらに、設定画面から当日の活動プログラムを選択すればそれに連動して質問項目も切り替わるようにするなど、これからスタッフの方々にとってより「使える」ようにする改変もできそうであった。今後には筆者たちは、質問形式などのソフト面だけでなく、こうしたパソコン導入などのハード面の工夫についても提案してゆきたいと考えている。

また、実は後にわかったことではあるが、ほぼ同時期に一小PTAの方々も開室当初の一学

期をふりかえるべく、あびっ子の楽しいところを親経由で子どもたちにたずねたり、良いところを保護者に挙げてもらったりするアンケートの準備を進めておられた。一定時期に総括的に実施するアンケートには、日々のふりかえりとはまた異なる利点がある。より詳しい質問ができることはもちろん、実施前と実施後の結果を比較できれば、利用児童の遊び方の変化など、あびっ子を開設したことによる効果についても検証できるはずである。行動観察のように異なる手法を用いればまた異なる様相が見えてくるものだが、それと同じく、同じアンケートでも手続きによっては違う視点から子どもの姿をとらえることができる。「子どもの声」は一人ひとり異なるだけでなく、声の聴きとり方によっても異なるのである。

よりよい活動運営を目指して現場で調査をするにあたって、調査目的に当たるモチーフは現場（スタッフや所轄）が定めてしかるべきだが、それをパートに当たる調査法個々にいかに割り当てて奏でるかについては、その道の専門家に託して委ねることも可能なはずである<sup>4)</sup>。地域が研究機関である大学が地域と連携する上では、学生ボランティアのような人的資源だけでなく、このような大学「ならではの専門性」を活かして使うことが豊かな稔りをもたらすであろう。今回の試みは、大学と地域の効果的な連携の在り方を検討する一助としても評価できると思われる。

## 注

1. あびっ子のサポーターとしては本学心理学科4年の袖山恵理が参加し、7月から9月まで夏休みを含め週2回は参加して子どもたちを見守りつつ、アンケート調査の実施も担当した。

また「放課後子どもプラン」によって体育館と共に利用可能になった学校図書室の利用実態をふまえながら、夏休み期間中にはそこで独自の活動を展開して、図書館が子どもに与える新たな可能性と、そこで大人が果たす役割について検討を行った。これらの彼女独自の研究成果については、以下を参照されたい。

袖山恵理 2008 子どもの居場所づくりにおける研究～小学校の図書室からの分析～ 川村学園女子大学文学部心理学科卒業論文

2. 立ち上げ当時のあびっ子では多いときには参加児童が80名を超えたのに対し常時対応する専属スタッフは3名であり、子どもたちの活動を見守るだけでも大変な中で、子どもの姿をとらえながらより良い活動を進めていこうとする強い意欲には頭が下がる思いであった。
3. 今日のアンケートは、質問個々としては小学生でも回答可能ではあるが、質問全体の配置については課題も残った。

たとえば、質問によって「一つだけ選んでください」「いくつでも選んでください」と単数回答と複数回答が混在していたが、低学年の場合は回答方式を切り換えることに混乱する場合があった。どちらかに揃える（複数回答を選択肢ごとに独立に「ある？ ない？」と単数回答方式に直せば、単数回答に統一できる）など、子どもに見合った尋ね方をさらに工夫する必要があるだろう。

4. 今回の質問項目の中にも、現場からの要請で組み込んだものが1つある。当時の現場スタッフたちは、途中帰宅してしまう児童たちは、あびっ子の活動を「つまらない」と思っていないかと少し心配しておられた。そこで本調査では、途中帰宅児童に「帰るのは用があるからか？」と尋ねる項目を付加して、その結果を報告書の**(結果 2：途中で帰った児童数と中途退所理由)**に掲載した。ただし、この現場の懸念(調査目標)が「途中帰宅児童は満足度が低いか確認すること」であったとすれば、新たな質問項目を設ける必要はなかった。最後まで居残った群と途中帰宅した群で満足度を比較してみれば、居残り群48名の満足度評定平均が3.5(標準偏差.85)に対し途中帰宅群131名は3.4(標準偏差.85)と、途中帰宅児童でも満足度に遜色はなかったことが検証されるのである( $t(177) = -.559, ns$ )。このような要因計画法の発想を用いれば、「組織的に・効率的に聴く」ことができるのを示す例であろう。

#### 引用・参考文献

文部科学省・厚生労働省放課後子どもプラン連携推進室 2007 放課後子どもプランー未来の大人たちのために、今できること <http://www.houkago-plan.go.jp>



我孫子市立第一小学校「子どもの居場所」  
あびっ子クラブ利用児童対象アンケート報告



- 本調査手続きの概要
- (結果1) クラブの利用頻度
- (結果2) 途中で帰った児童数と中途退所理由
- (結果3) 人気の活動場所
- (結果4) 活動内容の実際
- (結果5) 活動相手の実態
- (結果6) 大人との関わり
- (結果7) あびっ子クラブに対する満足度
- 総合考察
  - ・ 児童評価の総括
  - ・ 学年別の利用特徴
  - ・ 大人の関わり
  - ・ 活動評価のあり方

川村学園女子大学  
准教授 北原靖子  
教授 蓮見元子  
助手 川嶋健太郎  
教授 浅井義弘  
4年 1204035 袖山恵理

〒270-1138 千葉県我孫子市下ヶ戸1133 川村学園女子大学文学部心理学科  
発達心理学領域 北原研究室

## 本調査手続きの概要

表1. 本調査期間中のクラブ活動状況と調査手続き

調査日	当日の活動状況					X:受付児童数 (開始時点)	Y:調査協力児童数 手続 (A:一斉 B:随時) 把握率 (Y/Xの%)
	○:完全開室	△:部分開室	×	利用不可			
平成19(2007)年	体育館	校庭	メイン	2部屋	図書室		
7月7日(土)	○	○	○	×	○	17	3 (B) (17.6%)
9日(月)	○	×	○	×	○	61	16 (B) (26.2%)
10日(火)	○	×	○	○	○	67	18 (B) (26.9%)
11日(水)	○	×	○	△	○	59	16 (B) (27.1%)
12日(木)	○	×	○	×	○	77	16 (B) (20.8%)
13日(金)	○	×	○	△	○	56	17 (B) (30.4%)
17日(火)	×	×	○	○	○	84	16 (B) (19.0%)
18日(水)	○	×	○	△	×	66	48 (A) (72.7%)
19日(木)	×	○	○	×	○	59	19 (B) (32.2%)
20日(金)	○	○	○	×	○	57	10 (B) (17.5%)
調査合計日数	利用可能合計日数					合計人数	合計人数
10日	8	3	10	5	9	603人	179人 (平均29.0%)

## &lt;調査時期&gt;

平成19年7月7日(土)～7月20日(金)の計10日間。

## &lt;調査対象&gt;

調査期間中にあびっ子クラブを利用した児童延べ603名中179名(実人数108名、一日あたり把握率平均29.0%)。

## &lt;調査項目&gt;

「①:遊んだ場所」「②:遊んだ相手」「③:利用の楽しさ(4段階)」「④:自分の家で遊ぶ場合との楽しさ比較」「⑤:遊んだ内容」「⑥:帰る理由(途中退室児童対象)」(巻末資料あびっ子クラブひとことアンケート)。

## &lt;手続き&gt;

一斉調査A(7月18日)では、活動終了30分前の午後4時半時点まで活動していた児童(受付時のおよそ3/4)を対象に、各場所担当のスタッフが一斉にその場でアンケート用紙を配布回収した。他の9日間に行った随時調査Bでは、調査者(川村学園女子大学文学部心理学科4年次生)がメインルームに待機し、午後3時から4時半の間で帰ろうとする児童(受付時のおよそ1/4)にアンケートを依頼し、合意を得た者に配布回収した。

いずれも、記入が単独では困難な時は口頭で内容を伝え、その答えを書きとめた。また、各児童には個別コードを割り当て、10日間中の利用経過を把握した。

さらに調査B担当者は、本調査以後も平均週2回クラブに通ってサポーターとして児童を見守りつつ、適宜活動の具体的なエピソードを収集した。

## &lt;結果の処理&gt;

結果は個別コード別実施日別に集計表にまとめ、統計ソフトSPSS Ver. 13を用いて分析した。

(結果1) クラブの利用頻度

表2. 学年別回数別利用人数

学年	10日間中の総利用日数						合計人数	(%)
	1日	2日	3日	4日	5日	6日		
1年	14	10	3	3	1	1	32	(29.6)
2年	19	7	0	0	0	0	26	(24.1)
3年	8	2	1	0	0	0	11	(10.2)
4年	10	6	1	0	1	2	20	(18.5)
5年	11	4	0	0	0	0	15	(13.9)
6年	4	0	0	0	0	0	4	(3.7)
合計人数	66	29	5	3	3	3	108	(100.0)

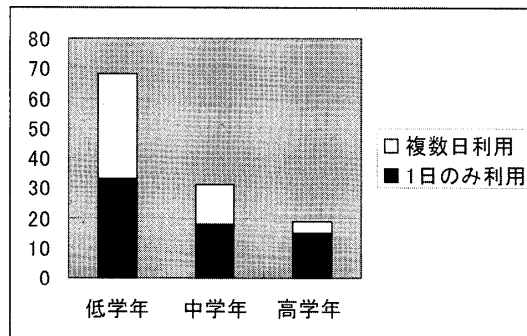


図1. 学年別利用頻度別の実人数

個別コードを元に各児童の利用経過を追跡したところ、延べ人数179名中108名(63.1%)が複数日利用であった。本調査では10日間で9日が途中で帰る児童のみを対象としていたため、最後まで活動していた多くの児童たちが集計から外れている。それをふまえると、実際にはより多くの児童が、何日も続けてクラブを利用していたであろう(表2)。

今回調査で把握できた範囲でも、利用状況には学年差があった。1,2年の低学年利用者は、総数は最も多いが利用頻度は少なく、10日間で1日のみ利用した者が多かった。3,4年の中学年は、その反対に、総数こそ少ないが複数日活用した割合が多かった。5,6年の高学年は総数も少ない上、多くが1日のみの利用に留まった(図1)。

(結果2) 途中で帰った児童数と中途退所理由

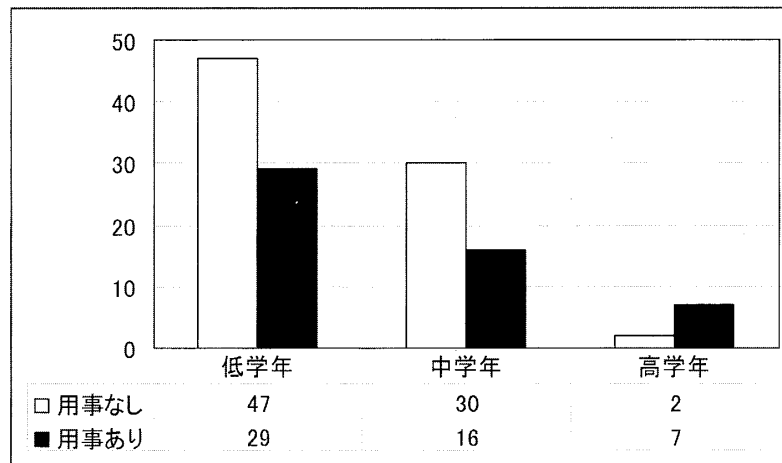


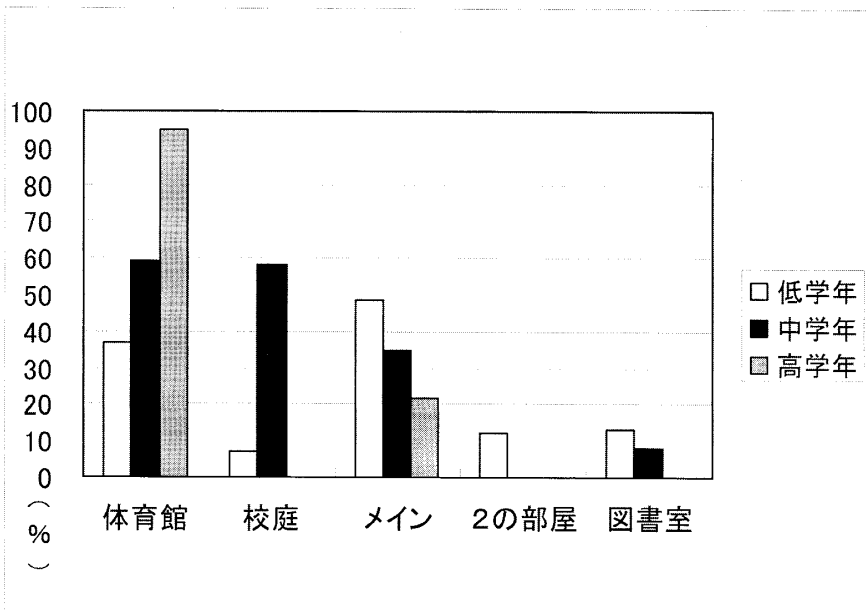
図2. クラブ途中で帰る事情の学年比較

午後2時半ごろに受付をした児童のうち、およそ1/4は4時半前に帰っていた。これらの途中退所児童131名に対し「途中で帰るのは用事があるからですか?」と尋ねたところ、52名(39.4%)が「はい」と答えていた。自由記述によれば、その用事とは「親との約束(何時に帰ると決めて来ている)」や「習い事」などであった(調査B, 図2)。学年が上がると用事がある割合が増えており、ことに高学年は忙しいことが伺えた。これらの「用事がある」児童は、事情が許せば、もっと活動していたと考えられよう。

ただし、特に用事はないが帰るとした中には、「いろいろあるから(2)」「友だちが嫌だから(1)」など、活動している中でなんらかの不都合を感じたらしい回答も、皆無ではなかった。

新規放課後活動に対する小学児童の満足度調査

(結果3) 人気の活動場所



注：人気支持率とは、その場所を「今日一番遊んだ場所（単一選択）」として実際に選択した児童数を分子、その場所が実際に利用できた日にクラブに来た選択可能児童数を分母として、各場所ごとに分子の分母に示す割合を算出し%表示したものである。

図3. 各場所「人気支持率」の学年比較

本クラブには「メインルーム（受付）」「2の部屋（予備スペース）」「体育館」「図書室」「校庭」の5つの活動場所があり、1日当たり平均3.3場所が利用可能であった。

各場所の人気を調べる指標として、「いちばん遊んだ場所（1つのみ選択）」への回答数を元に「人気支持率」を試算したところ、全体としては体育館がもっとも人気が高く、次いでカードゲームなどができるメインルームが挙がった。

低学年ではメイン、2の部屋、図書室などの室内がより選ばれたのに対し、中高学年では校庭や体育館の室外が選ばれており、学年によって活動拠点が異なっていたことが伺えた（図3）。

なお、普段の観察によれば、「2の部屋」は当日の混雑に応じて「メイン」の予備としても機能しており、図書室は皆から「いちばんほっとする場所」とされていた。支持率としては目立たないが、これらの場所も独自の役目を果たしていたといえる。

## (結果4) 活動内容の実際

表3. クラブで行ったこと (自由記述複数回答、( ) 内数字は記入数)

主な活動内容 (各場所につき、記入数上位4位まで)	特定された 場所	記述数 合計 (%)
ドッジボール (44)、バスケット (17)、バドミントン (9)、 フリスビー(8)	体育館	80 ( 28.0%)
サッカー (5)	校庭	5 ( 1.8%)
カードゲーム (26)、野球盤 (25)、コマ (15)、お絵かき (15)	メインルーム	133 ( 46.7%)
習字 (6)、けん玉 (3) (いずれもチャレンジタイム)	2の部屋	9 ( 3.2%)
本読み (15)、紙芝居よみきかせ (2)、勉強 (1)	図書室	18 ( 6.3%)
鬼ごっこ (16)、なわとび (13)、リレー (7)、かくれんぼ (4)	特定不明	40 ( 14.0%)
総記述数		285 (100.0%)

「クラブで何をしたか」についての自由記述総数は、285に達した。それによれば、児童たちは用意された道具や材料を利用しながら、各場所で遊びを中心にさまざまな活動を展開していた。

中には、「鬼ごっこ」「かくれんぼ」など、子どもたち独自の創意で行った遊びも挙がっており、単なる受身一方ではなく、工夫して活発に遊んでいたことが伺えた (表3)。

行動観察からは、危険防止のため本当は禁止していた種類の鬼ごっこ (「色鬼」) を廊下で始めて制止されるなど、時には逸脱エピソードも見受けられた。

新規放課後活動に対する小学児童の満足度調査

(結果5) 活動相手の実態

表4. 誰と遊んだか(複数回答)

		遊び相手				実人数合計
		同クラス	他級他学年	ひとり	おとな	
低学年	人数	64	42	8	15	99
	(%)	57.7%	49.4%	88.9%	88.2%	55.4%
中学年	人数	37	26	1	2	57
	(%)	33.3%	30.6%	11.1%	11.8%	31.8%
高学年	人数	10	17	0	0	23
	(%)	9.0%	20.0%	0%	0%	12.8%
合計人数		111	85	9	17	179
合計%		(100.0%)	(100.0%)	(100.0%)	(100.0%)	(100.0%)

一緒に遊んだ活動相手としては、「同じクラスの友だち」「他のクラスや違う学年の友だち」は多かった。「ひとり」を選択した児童も大抵は併せて先の二種の「友だち」も選択していた。「図書館でひとり本を読んだあと、体育館で友だちとなわとびした」といったように、1日の中で複数の活動を行っていたと考えられる。

低中学年では「同クラス」が「他級他学年」を上回ったが、高学年ではそれが逆転し、他クラスや異学年と関わったとする回答の方が多くなった。また、「大人と遊んだ」とした回答は全179名中17名(9.5%)に留まり、その大多数が低学年で、高学年は皆無であった。

本回答からも、児童が自主的に活動を進めており、ことに学年が上がると通常の学級活動とは異なる「新たな仲間関係」が活発だったことが伺えた。

ただし、低学年、ことに1年生では、まだ何をすればよいかわからず「ひとり」になることもありそうで、配慮が必要であろう。

(結果6) 大人との関わり

表5. スタッフやサポーター関わったエピソード

場所	児童	エピソード
体育館	中学年男子 (数名)	ドッチボールをしていたところに、低学年女子数名が参加を希望した。サポーターは始め見守っていたが、危険を感じたため、「左手で投げる」などのルールを提案した。快く受け入れてくれ、うまく遊べた。
校庭	中学年女子	鉄棒をしながら友数名とおしゃべりをしていた。水分補給の呼びかけのためにサポーターが寄っていくと話がはずみ、部活動や習い事の悩みを打ち明けてくれた。
メインルーム	低学年男子 (数名)	トランプの後何をしようかわからない様子だったので、サポーターが声かけて一緒にジェンガをやった。ルールが飲み込めたところで手を引いた。
2の部屋	高学年男子	チャレンジプログラムで、けん玉に熱心に取り組んだ。スタッフに教わりながらも、独自の技を生み出していた。また、その技を大人や他学年児童に教える場面もあった。
図書室	低学年女子	サポーターに「読んでほしい本がある」と話しかけてきた。数冊読み聞かせをしていると、他の児童数名も寄ってきた。一通り読み終わると、それぞれはまた自分の読書を始めた。

大人は児童の主体的な活動を尊重し、「見守る」姿勢が中心であった。ただし行動観察からは、実際には随所で大人の声かけが必要だったり、児童が声かけを求めていたりする様子も伺えた(表5)。大人側のさりげない調整が、児童の活動を支えていたといえよう。

また、調査期間中に2回「2の部屋」でチャレンジタイムが企画され、児童は大人のリードの元で、新しい活動に挑戦した(7月10日はけん玉に25名、7月17日は習字に32名の参加、いずれもクラブスタッフ調査に基づく)。このときクラブに来ていた本調査に応じた児童は計34名であり、そのうち4名(11.7%)が、「2の部屋」を「もっとも遊んだ場所」に挙げていた。



新規放課後活動に対する小学児童の満足度調査

(結果7) あびっ子クラブに対する満足度

表6. 学年別満足評価

学年	満足感				合計人数	(%)
	ちょっと	ふつう	まあ	すごく		
1年	4	9	11	42	66	(36.9%)
2年	0	3	5	25	33	(18.4%)
3年	0	0	0	15	15	( 8.4%)
4年	2	9	8	23	42	(23.5%)
5年	0	0	10	9	19	(10.6%)
6年	0	3	0	1	4	( 2.2%)
合計人数	6	24	34	115	179	(100.0%)
(%)	(3.4%)	(13.4%)	(19.0%)	(64.2%)	(100.0%)	

その日の活動をふりかえて「すごく楽しかった」とした児童数は179名中115名(64.2%)に達し、大変好評であった。ただし、低学年や高学年では、「ちょっと」「ふつう」などの控えめな評価も認められた。また中学年ではあっても、3年は全員が最高評価に対し4年はずっと辛口で、評価についてはかなり異なっていた。

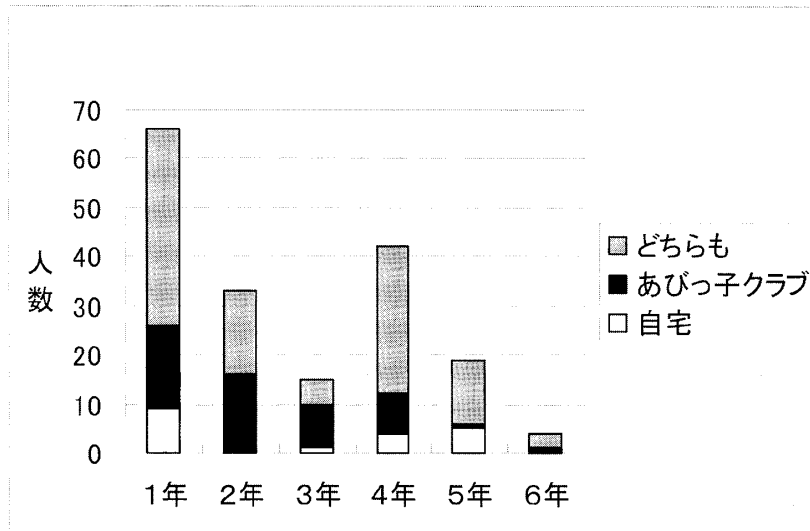


図4. 「あびっ子」と「家」のどちらが楽しいか

「あびっ子」「自宅」の比較評価については、全体として過半数が「どちらも楽しい」と回答し、たとえクラブがあったとしても、児童にとっては家庭が他にかけがえのない存在であることが伺えた。

ただし、3年生のみ「あびっ子」選択が「どちらも」を上回り、満足度合いと同様に、3年においてももっともクラブ満足度が高いことが伺えた(図4)。

## 総合考察

### <児童評価の総括>

参加児童数、利用場所、遊びの内容、満足度など複数の観点から見て、当クラブは多くの児童たちに有益に好評のうちに利用されており、十分な実績を挙げていたといえる。

チャレンジタイムのような特別な活動や、ボールやゲームなど特別な道具がなくとも、友だち同士で自主的に活動がなされていた。

### <学年別の利用特徴>

本調査結果に基づけば、学年の活動特徴は、以下のとおりであった。

#### 1,2年生の低学年

もっとも利用者数が多い「当クラブ最頻の訪問者」である。

ただし、まだ十分にうまく遊べてはおらず、大人が活動のきっかけを積極的に提供してゆくことが求められる。一方で、休止補給なしに活動を続けて調子を崩すことがないように、気をつける必要もある。

#### 3,4年生の中学年

もっとも主体的に活動し、評価も個性的な、ギャングエイジらしい「当クラブ最大の活用者」である。

時にはルールを踏み越えてしまったり、遊びに夢中になって友だち同士でいさかいを生じたりもする。同じ中学年でも、4年生の評価は3年のように手放しの肯定ではなくなっていたのも、自由な仲間遊びの中に何らかりリスクやコストがあることを体験したためかもしれず、注意を要する。大人はリスク管理についてしっかり意識しておく必要がある。

#### 5,6年生の高学年

異なるクラスや学年の児童と多く関わり、子ども同士の新しい活動を実現した「当クラブ最高の功労者」である。

初年度の本調査では、すでに塾や他の地域活動の場をもっていたために、様子見に留まる者が多かった。いずれ活動が年を重ねて現在の中学年が高学年に達する頃には利用も増え、よりリーダーシップが発揮されると期待したい。大人は、彼らが「年下の世話」だけに追われることがないように、今後は彼らに魅力ある高度な遊びについても工夫したい。また、自主的な学習活動を支援する可能性も検討できよう。

### <大人の関わり>

当クラブでは単に場所を開放するだけでなく、「2の部屋」を利用してチャレンジタイムを提供し、地域住民の主体的な参加に工夫をこらしていた。本調査実施後も、『紙ねんどで作るトレイ』『ショートテニス』『お琴・尺八』などさまざまなプログラムが行われ、さらに夏休み中の2日には『スタディタイム』として、2学期に向けての学習準備支援が実施された。今後も、対象学年を意識して企画するなど、さらに発展展開できるだろう。

一方で、日々のさりげない関わりの中にも、活動を守り育てる細やかな配慮が求められていた。こうした現場の「見守る知恵」を汲み取り、きちんと伝承してゆくことも重要である。

### <活動評価のあり方>

今回の調査方法からは、いくつかの問題点や反省点が明らかになった。まず質問紙に記入する方式は、低学年ではことにむずかしかった。また、同時にPTAを中心として保護者調査が行われ貴重な資料が得られたにもかかわらず、まだ相互に連携を図っていなかったため、十分な比較参照ができなかった。

## 新規放課後活動に対する小学児童の満足度調査

これらの反省を生かして、より総括的で効果的な評価方法を確立してゆくことが求められる。具体的には、少なくとも以下の3種類の評価が想定される。

### 児童自身による当日活動評価

「どこにいたか」「何をしたか」「楽しかったか」などの基本的な事項については、パソコンの音声ガイドやタッチパネルなどを利用して児童自身の手で直接回答できるようにし、その結果をすぐ一覧にするプログラムを開発すれば、効率的である。クラブ間で共通の手続きを開発できれば、各クラブごとに調査法を試行錯誤する手間も省ける。

### 保護者や学校の協力を得た総括的活動評価

すでに本校でも「親子評価アンケート」が実施されていたが、もし当初から問題意識を明確にして児童対象調査と連携しつつ行っていれば、少ない時間でより有益な示唆が得られたと思われる。たとえば、「クラブを利用する頻度」と「ゲームにふける程度」との関わりを調べることで、「クラブの意義（効果）」など、より抜本的な評価検討が可能となる。こちらは年度内に1, 2回の質問紙実施が適当であり、やはり基本スタイルを開発しておけば、どのクラブでも利用できるだろう。

### スタッフやサポーターによる活動評価

学校と地域との連携という視点からみれば、保護者はもちろんのこと、クラブに関与する大人側の意見や評価を汲み取ってゆくことも肝要である。また、「こんなふうにやればいい」「こんなこともできる」という実際例をまとめて公開できれば、有為なサポーター確保にも役立つ。

このように、適宜随所で点検評価を重ね、その成果を公開してゆくことによって、さらなる発展が期待できるのではないだろうか。こうした評価法の開発にあたっては、地域の大学など、専門リソースと連携を図るのもよいだろう。

資料1. ひとことアンケート




2007.7. ( ) ( ) ( )

「あひっ子クラブ」ひとことアンケート      2007.7. ( ) ( ) ( )

Q あなたの名前と学年をかいてください  
 名前：( ) 学年：( ) 年生

① 今日いっぱい遊んだ場所は、どこですか？ 一つだけ○をつけてください  
 体育館 ・ 校庭 ・ メインルーム ・ 2の部屋 ・ 図書室

② 今日は何れといっしょに遊びましたか？ いくつでも○をつけてください  
 クラスの友だち ・ ほかのクラスや学年の人 ・ ひとり ・ おとな

③ 今日はどれくらい楽しかったですか？ 一つだけ○をつけてください  
 すごく ・ まあ ・ ふう ・ ちょうどだけ  
 ・ 

④ 今日あひっ子クラブで遊んだのと、じぶんの家で遊ぶのとでは、どちらが楽しいですか？ 一つだけ○をつけてください  
 じぶんの家 ・ あひっ子クラブ ・ どちらも楽しい  
 何がたいてい楽しかったか書いてください。

⑤ 今日あひっ子クラブでどんなことをしましたか？  
 (例えば、サッカー、コマ回し、本読みなど)

⑥ 今日これで帰るのは、用があるからですか？  
 はい ・ いいえ